

長野県革新懇ニュース

2025 年 10 月号
発行日 10 月 10 日
会 費 2,000 円
購読料 3,000 円 (送料込)
振 替 00510-3-15971

310

発 行 日本と信州の明日をひらく県民懇話会
(長野県革新懇) 発行人：山口光昭 編集長：高村裕
〒380-8790 長野市県町 593 高校教育会館内
TEL：026-234-1231 FAX：026-234-2219 メール：mail@nagano-kakushinkon.com

==== 今号の主な記事 =====

- 1 面 大野博人、朗子さんインタビュー
- 2 面 1 面続き、「松枯れ対策をめぐる諸問題」村山隆さん
- 3 面 中信 憲法9条の碑除幕式、国際世論の包囲でイスラエルの蛮行をとめよう、読者の声、漢字クイズ
- 4 面 「雨よ降れ」「講演」はロックだ 窪島誠一郎さん
「信州の大地と私たちの暮らし」 花岡邦明さん
映画評論『黒川の女たち』 内山到さん

長野県革新懇

検 索



フランス人ジャーナリスト クロード・ルブラン著

『山田洋次が見てきた日本』の 翻訳に関わって

お お の ひろひと 大野 博人さん

(元朝日新聞論説主幹)

お お の さ え こ 大野 朗子さん

(フランス語翻訳者)

大野博人 1955 年生まれ。朝日新聞記者としてジャカルタ、パリ、ロンドンの特派員、外信部長、論説主幹などを務めた。コラム「日曜に想う」も担当。著書に新聞連載をまとめた『民主主義って本当に最良のルールなのか、世界をまわって考えた』(共著、東洋経済新報社) 仏歴史家マニユエル・トッドのインタビュー集『グローバリズム以後』(共著、朝日新聞) など、2020 年に退職。

大野朗子 1954 年生まれ。通訳、翻訳者。訳書にジョルジュ・ミノワ『老いの歴史』(共訳、筑摩書房)、マルタン・バージュ『僕はどうやってバカになったのか』(青土社)、シャンサ、リシャル・コラス『午前4時、東京で会いますか?』、シャンサ『天安門』(いずれもポプラ社) など。

山田洋次作品の評価を
フランスで高めたい

Q フランス人のクロード・ルブラン著『山田洋次が見てきた日本』の翻訳をされた経緯をお聞かせください。

著者であるクロード・ルブランとは、私(博人)が朝日新聞のパリ特派員時代に知り合いました。彼は向こうの新聞の東アジア担当で、私はフランス中心にヨーロッパを担当していたので、お互いに記事の内容について意見交換していました。彼は学生時代から日本語をやっていて、日本について詳しくて日本映画も好きだということで、そういう話も時々していました。そんな中で、山田さんの映画を高く評価していることを話すわけです。私たちも山田映画

はよく観ていましたが、寅さんをはじめとする作品がそんなにフランス人に受けるのかピンと来なくて「寅さんについてフランスで本を書くの?」みたいな反応を示したら、彼がうんざりしたような顔をして「日本人は、寅さんというの自分たちにしかならないか」と思っているけれど、そう考えているのは日本人だけだ」と諭されました。その後、彼とは山田作品を含む日本映画の話を何度もしてきましたし、彼自身も日本映画の上映会をやったりしていました。そうこうしているうちにコロナ禍であちこち出歩けなくなると、彼は溜め込んだ山田さんに関する資料などを駆使して、評伝を書くことにしたわけです。フランスでは日本映画の評価は一般にとても高いのに、山田作品だけは低く見られている。それを改めなければという思いも強かったようです。

フランスで出版されるとすぐ本を送ってくれました。読んでみたら面白かったのですが、自分たちが訳すことになるとはまったく思っていませんでした。コロナ禍がおさまると、クロードは毎年のように日本にやってくるようになりました。いつも安曇野のわが家に寄ってくれたのですが、そのたびに寅さんの話ばかりしていました。そして誰かに訳してほしいと言って、私たちをじいーと見るのです。だから、逃げられないという感じになって、訳すことになった次第です。山田さん自身にも早く読んでもらいたい、そのためには早く訳さな

いといけないというので、夫婦二人がかりで取り組むことにしたわけです。

問題は出版社でした。つてを頼っていくつかの出版社に打診しましたが、反応はたいして同じで「とても面白いと思うが、分厚すぎる」と否定的でした。原書は約800ページ、厚さが5センチにもなる大著ですからそこがネックで、ちよつと無理かなと思っていました。ところがクロードが自分で大月書店にコンタクトを取ったところ、引き受けてくれることになりました。

この本のタイトル『山田洋次が見てきた日本』は原書のとおりです。つまり、この本のテーマは「山田洋次」というだけでなく、「日本」でもあるということです。山田さんの中国での幼少期から映画の道への歩みを辿り、脚本や監督に携わった全作品を紹介し、解説しながら、そのときそのときの日本の社会や人々の暮らしの移り変わりをつづさに描いています。つまり山田さんの目から見た日本の変貌が大きなテーマだといえます。それがクロードの評伝の書き方の特徴の一つだと思います。

社会統合を図る上で 文化の役割は大きい

Q フランスの文化のあり方についてお聞かせください。

私たちはフランスの文化の専門家というわけではありませんが、日本との違いに気づくことはあります。例えば、

有名なルーブル美術館。入りの料金表を見ると、一般来場者は結構高いのですが、身障者や若者などは無料、さらに失業者も無料です。それはルーブルだけのことでありません。失業者無料というのは音楽会や映画館などでも見かけたことがあります。ルーブルの副館長に会うと、そもそもルーブル美術館とは何かということから話が始まりました。それによれば、フランス革命で王政が終わり、宮殿とその中の美術品などの財産がすべて国民のものになった、であれば、すべての国民に鑑賞する権利がある、だからルーブル美術館は基本的に無料でなければならぬということでした。ただ、維持などに経費がかかるので、一定の工夫をして入場料をやむなく徴収しているにすぎないとのことでした。

映画や音楽にも相当補助が出ています。映画についてはお祭りのようなイベントが1週間ぐらいあつて、チケットを買ったら観たい放題なんです。そうすると若い子もみんな行けるので、この映画館でこれを観て、走って次の映画館に行ったら別の作品が観られるというように街中で映画を観て回ります。音楽の日というのもあります。文字通り音楽の祭りですが、6月の夏至の日にあります。一年で一番日が長い日です。プロもアマも街角などあちこちで遅くまで音楽をやつて、あらゆるジャンルの音楽が街にあふれます。みんなが参加でき演奏もできる。もちろんちゃんとした演奏会もありまづ続そう